

コタンメール

第10号 2003. 3. 10発行

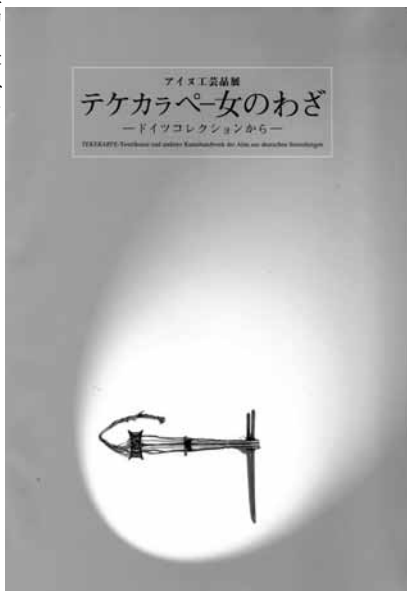


ドイツで「アイヌ展」開催

先日、ドイツ、ミュンヘン州立民族学博物館に貸出していた資料が返却されました。

ミュンヘン、札幌姉妹都市30周年記念事業のひとつとして2002年11月28日～2003年2月23日まで開催された特別展「The Ainu -Portrait of a Culture in the North of Japan」（アイヌ～北日本文化の肖像）において東京国立博物館やドイツ、オランダにあるアイヌ関係資料とともに展示されました。

これまで海外の博物館でのアイヌ資料の展示は、日本文化をテーマとした常設展、特別展のなかに含まれることが多いのですが、アイヌ文化を総合的に取り上げた特別展は、アイヌ民族博物館がフィンランド、ノルウェー、スウェーデン、ロシアでおこなった展覧会以外では、1987年にドイツ、ケルン市立民族学博物館で開催されたのを最初に、1995年のイギリス、大英博物館民族学部門でのマンローコレクションを中心とした展覧会、2000年のアメリカ、スミソニアン国立自然史博物館、2001年のロシア国立民族学博物館とこのミュンヘン州立民族学博物館での展覧会だけです。



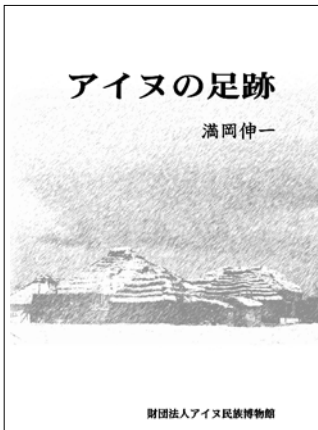
ミュンヘンでの展覧会は、アイヌの風俗を描いたいわゆるアイヌ絵と呼ばれる絵画資料を中心に儀礼用具、生活民具、写真等からアイヌ文化を現代まで紹介しています。

アイヌ民族博物館が貸し出した資料は、アイヌ絵（錦絵も含む）20点とイナウ類で、近世松前で活躍した風俗絵師でアイヌ絵師の中で最もさきがけ的な存在であった小玉貞良の作品「アイヌ盛装図」をはじめ、同じ松前藩の絵師でアイヌ絵の号に「二司馬（注：アイヌ語のニシパに漢字をあてた名）」を用いた早坂文嶺の「磨智胡楼（まちこる）」、浮世絵師である歌川国芳が1850年頃に描いた「山海愛度図絵」など、どれも優れた絵画資料です。

今回、ドイツに資料を貸し出すきっかけとなったのは、1999年にアイヌ民族博物館が開催したアイヌ工芸品展「テケカラペ 女のわざ～ドイツコレクションから～」で、ドイツ国内のアイヌ資料約3,000点の中から日本国内でも珍しい鳥羽や毛皮、魚皮を使用した衣服などを借用して展示しました。その際に、協力いただいたのがミュンヘン民族学博物館館長のC.ミュラー氏（当時ベルリン国立民族学博物館副館長）でした。博物館間のつながり、人とのつながりが私たちの活動の環を広げて、アイヌ文化を世界へと発信することができるのですね。

（学芸課 村木美幸）

『アイヌの足跡』(改訂版)



満岡伸一著
アイヌ民族博物館編

A 5判280頁
定 価：1,200円(税込)
2003年3月、改訂9版増
補発行
(大正13年初版発行)

明治後期から昭和初期にかけての白老アイヌの生活を描いて定評の名著です。和人の文化に浸食され、失われつつあったアイヌプリ(アイヌ古来の風習)。著者満岡伸一は、白老郵便局長の傍ら白老アイヌの隣人として30年間を白老で過ごし、その記録をライフワークとしました。概説書でありながら記述は極めて詳細で、特に民俗誌関連の各章は今日でも第一級の資料です。また著者自身によるスケッチや、妻であり歌人でもあった満岡照子氏の短歌も多数掲載。

改訂9版では、旧版で読みにくかった旧字・旧かなづかいやアイヌ語の表記などを全面的に改訂。8版に未収録の図版、文も収録。巻末にアイヌ語索引、事項索引を追加しました。

まめ知識4

くじ引き民主主義 の巻

さて問題です。昔のアイヌにじゃんけんはあったのでしょうか？

答えは、じゃんけんはなかったけれど、その代わりにくじ引きがありました。戦前、白老郵便局長を務めた満岡伸一氏が『アイヌの足跡』に書いています。ウコニツエタイエと言って、棒を引いてその長短で勝ち負けを決めたそうです。もちろん子どもの遊びにも使われましたが、おもしろいのは犯罪事件の犯人を決めるにも使われたこと。

もっとも、これはちょっとした犯罪の場合で、重大事件ともなればウサイモンキレという火責め、水責めの拷問を行いました。また、チャランケ(弁論による決闘)といって、紛争が生じたときにこれを申込み、どちらか一方が倒れるまで二日も三日も夜通し弁論しあい、倒れた方が負けというものもあります。こうなると「朝まで生テレビ」なんてメジャありません。

「なんと理不尽な！」と思ったあなた、それはちょっと違います。

昔のアイヌは倫理観が非常に強く、犯罪も和人社会に比べればずっと少なかったそうです。そこには強い信仰に裏づけられたモラルがあります。ですから潔白を神に証明してもらうために、拷問も自ら進んで受けたと言います。火責め、水責めの火、水は、ともにアイヌにとって大変偉い神様。やましいところのある人は、火傷(火の神が与える罰)する前にごめんなさいしますし、潔白な人

は神が味方してくれると信じて一步も引きません。『アイヌの足跡』には、白老で実際にあった火責め、水責めの例が紹介されていますが、その心根に頭が下がる思いがします。

チャランケだって、上下関係の少ない平等な社会だったからこそこの制度です。今ならどんな理不尽なことも、上司や権力者の命令とあれば文句も言えませんが、チャランケはどんな相手でもこれを申し込まれると受けなければなりません。一種の裁判ですが、裁判官も弁護士も口出し無用、財力も地位も関係なし、一対一、信念の強さと論争術に長けた方の勝ちです。

みなさんも文句を言いたい上司も多々おありかと存じますが、今の社会では言いたいことを言ってスッキリした後は失業です。それに比べると、くじ引きも拷問もチャランケも、公平さという点ではこれに勝るものはありません。身の回りから国連まで、正義が数や力で左右される現代社会と比べると、ずっとましだと思います？

アイヌをはじめ世界の先住民族はご存じのとおり少数者です。数の論理、多数決民主主義では、多数者を味方につけない限り、どんなに主張が正しくとも勝ち目がありません。

さて、イラクとアメリカがチャランケをしたら、一体どっちが勝つでしょう。勝敗の見える戦争なんてただの弱い者いじめですが、チャランケだったら勝機は平等。私も口下手ですが、徹夜には自信あり。やってみたい相手もいろいろと…。

(安田益徳)